近世の歌人

日本歌人

文学博士 久松潜一
文学博士 實方 清 編

日本歌人講座 第五巻

近世の歌人

弘文堂

日本人歌座講本

近世の歌人

近世の歌人

昭和四四年一月三〇日　初版発行

定価一、五〇〇円

編者　久松潜一
　　実方清

発行人　鯉渕年祐

株式会社　弘文堂

本社　東京都千代田区神田駿河台四の四
電話（二五一）七一八六（代表）
郵便番号　一〇一

営業所　東京都文京区関口一の一四―八
電話（二六〇）〇四二〇～一
郵便番号　一一二

振替　東京　五三九〇九番

本製林若　　刷印堂ま づあ

序

日本の抒情文芸の中心は和歌であり、和歌の中心は短歌である。抒情文芸の本質は抒情性と言う文芸性の中に認識される。この短歌は記紀の和歌から現代短歌に至るまで二千年に及ぶ美的伝統の中に生成発展してきた。この発展の相を文芸史的に見ると四つの大きい美的世界において認められる。それは万葉の世界と古今の世界と新古今の世界と近代短歌の世界とである。これを時代的に見ると上古と中古と中世と近代とである。近世は抒情文芸史の上では一つの谷間であった。和歌はこの四つの世界の中でその本質的世界を美しく表現して来た。この和歌史的展開をその美的内容の上からみると、純一と壮大な世界から典雅と連想の世界へ、そして幽玄と優艶なる世界へと展開し、近世と言う谷間を通って近代に至り浪漫と写生の上に近代短歌の絢爛たる美的世界を見ることができる。万葉の世界が成立するためには記紀の和歌と言う源流の世界があり万葉はここから発展成立し、感動と観照との中で壮大純一なる抒情の世界を創造したのである。柿本人麿と山部赤人とはその二つの世界を代表する歌人であった。この万葉の世界によって上古の和歌が形成されたのである。古今の世界は俊成や定家が庶幾した世界でもあって、典雅と連想の中に中古の和歌の世界を形成し、紀貫之・曾禰好忠・和泉式部・源俊頼等の代表歌人を出している。次いで新古今を中心とする中世和歌は上限に千載集があり、下限に玉葉集や草根集によって和歌史上最も光輝を放った中世の和歌の世界を形成し、俊成・西行・定家・爲兼・正徹などの代表的歌人を輩出している。ある意味ではこの中世の和歌によって和歌の本質的世界が形成されたとも言える。近世の和歌に至ると、古典歌集を庶幾する意識の中に、万葉主義の和歌と古今主義の和歌と新古今主義の和歌とが真淵と景樹と

宣長とを代表として形成されたのである。これに加えて現実主義の和歌が万葉主義との関係の中で形成され良寛や言道によって代表された。この近世の和歌は上古の和歌や中世の和歌のように本質的特色を持つものではなく古典歌集の中にその生命を見出そうとしたものである。それが近代になると短歌の世界は見事に開花し、浪漫派の短歌が先ず現われ、次いで現実派短歌と写生派短歌は多くの代表的歌人を輩出し、近代短歌はその極致を示現した。晶子によって浪漫派短歌が極致に達した後に現実派と写生派の中に左千夫・節・赤彦・啄木などが現われ近代短歌は充実と絢爛を競うたのである。そして近代短歌より現代短歌へと多くの歌人を輩出しながら推移して行った。

この和歌の発展の中で和歌史を形造った代表的歌人六十二人を選んでこれを八巻に編成しここに「日本歌人講座」を編集した。本講座は歌人の単なる評論ではない。専門の学者によって精細に研究された歌人論であり、歌人の抒情性の究明であり、その美的世界の認識である。従って現在の学界における歌人研究の最高水準を示すものである。本講座は世上にある雑多な事項や多くの歌人について雑纂的に編集されたのでなく、和歌史の体系を考え上古から近代現代に至る迄の和歌の本質的世界を明らかにし得るように代表的歌人を体系的に整序し、多年に亘って研究を深めた専門の学者によって精細をつくして研究されたものである。幸に和歌研究の専門学者の全面的協力を得てこの「日本歌人講座」全八巻を刊行し得ることは学界のため誠に喜ばしいことである。本講座に対して広く文芸を愛し和歌に関心を持たれる多くの人々の積極的な協力を願う次第である。

昭和四十三年九月一日

責任編集者　久松潜一　實方清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

近世の歌論……實方清……一
賀茂真淵……井上豐……四九
田安宗武……山本嘉將……一〇一
小澤蘆庵……香川景松……一五三
香川景樹……黒岩一郎……一八七
良寛……宇佐美喜三八……二四五
平賀元義……朝下忠……三〇一
橘曙覽……山崎敏夫……三五三
大隈言道……上田英夫……四一三

近世の歌論

實方清

一

和歌の本質的世界を認識するためには、歌論が必要であり、歌論の世界を理解することによって和歌の世界は把握し得る。近世和歌も近世歌論の根底の上によりよく理解される。日本の歌論は中古に於て成立し、中世に於てその本質が形成され、それが近世に於て色々な方面に展開し、古典主義の立場と自由な立場との交錯がみられ乍ら近代へと発展したのである。中世と近代の間にある近世の歌論は色々な意味で注目すべきものがある。近世歌論は全体的にいうならば古典主義の傾向が多く、万葉集と古今集と新古今集とを理想とする考え方が強いのであり、これ等の古典の生命にふれ、その中に生きようとした考え方があきらかである。と同時に中世歌論とは別な意味で自由にその歌論を述べているところにも特色が認められる。一部には自由にして特色のある歌論が現われたが、全体としてみると保守と伝統の中に苦悩した中世から近世に入ると、学芸復興の合理的精神によって自由に色々な歌論が考えられたのである。色々な歌論が自由に考えられながらも、そこに古典を中心とする古典主義は大きい存在であった。近世歌論は古典的・自由的・理論的・現実的・演繹的ということがその特色として考えることが出来るであろう。古典的というのは古典の中に歌のあるべき風体を求め、これに歌としての理想を庶幾し、そこに芸術的価値を認識したことである。それは古典としての万葉集と古今集と新古今集とが尊重され、その中に歌論の本質と体系とを考えたものであり、この考え方は自由且つ理論的に行なわれたのである。全体からみれば近世歌論は自由的であるが、古典主義という点に於て伝統的であるともいえる。しかしこの古典主義であるが故に伝統的であるということは、中世の伝統的ということよりは自由的であったことは否定出来ない。こ

の古典主義と共に近世歌論は理論的に精密を加えてきたことも事実である。国歌八論・石上私淑言・歌袋・歌学提要などはその代表的なものであるといえる。歌論に於ける自由主義は近世に於てみられる処であるが、中世に於てはみることが出来なかった。為兼が二条派歌学に対して自由な意見をのべているが、その他は自由があったとはいいがたい。古典的ということについて考えてみると、これは万葉と古今と新古今の三古典を中心とする考え方であって、而も古典の本質的生命に対して自由な批判と認識とがなされているところに特色が認められるであろう。万葉集を中心とする近世歌論は万葉主義を形成し、主として「まこと」を中心として歌論を展開しており、真淵によって代表される。古今集を中心とする歌論は古今主義を形成し、主として「しらべ」を中心として歌論を展開して、景樹によって代表される。新古今集を中心とする歌論は新古今主義を形成し、主として「あはれ」を中心とする歌論を展開して宣長によって代表されている。この「あはれ」は「もののあはれ」の意味にも広く解釈され「もののあはれ」主義歌論をも形成し、余情幽玄を主とする中世的新古今主義とも通ずるものである。これ等の古典主義は古典の形式的認識ではなくして、古典の生命にふれ、短歌の時代性を把握し、古典の生命を新しい形で復活せしめようとしたもので、その点で注目に値するものがある。

近世歌論は古典主義的という点からもう一つの特色が必然的に考えられるのである。中世の歌論は歌合の批評意識より帰納的に考えられた点が多く認められ、歌合判詞によって歌論上の美的理念は多く規定づけられたのであるが、近世歌論に於てはこの歌合批評意識の欠如ということが考えられる。と同時に歌合判詞という特殊な形式を用いなくとも自由に歌論の形式で立論できたのである。従ってその歌論は帰納的ではなかった。歌合判詞とは別に古典というものが根本的に表に出たので、従ってこの古典による考え方が出たのであり、必然的に演繹的となったのである。この演繹的であるということも近世歌論の一つの特色である。と同時に中世歌論に於てやゝ

もすれば自然と宗教的な観念に支配されがちで、人間の情感を軽く考えた処があったのに対して、近世歌論では人間の本質としての情感を重んじ、人間性の中に生きて歌論を形成しようとした点が多く認められる。中世が文芸的な情趣の世界を重んじたのに対して、近世に於ては人間的な心を重んじこれを和歌の中に関係づけたのである。人間的な心としての「まこと」や「もののあはれ」の如きはその中心をなすものであった。「まこと」は近世歌論に於てとくに問題とされたもので「まこと」の本質把握史は近世歌論史の重要な側面を形造るものであるといえる。それは近世初期の堂上派の歌論から近世末期の歌論に至るまで「まこと」は色々な意味内容に於て認識されており、万葉主義でも「まこと」が古今主義でも「まこと」が問題にされ、この「まこと」に関連して多くの歌論形成が行なわれているのである。また人間の心が歌の心として表現されることを中心として、これを分析して理論的にも精緻な歌論を形成しているものに富士谷父子を認めることが出来る。即ち成章と御杖とは極めて理論的な考え方を述べている。これは理論的であり、「歌そらごと」の主観主義的なものに対して客観主義的なものである。だから客観主義歌論の体系として考えることも出来る。これに対して大隈言道の歌論の如きものは「まこと」を中心とした現実主義的傾向のものであって、現実主義歌論とよばれているのである。古今集序に於て説かれた「まこと」と「さま」の関係は歌論史の極めて大きい問題として認識されるに至ったことは注目すべきことである。だから近世歌論の内容を考えこれを体系づけてみると、古典主義的なものと客観主義的なものと現実主義的なものの三つに大きく分けられるであろう。そしてこれを体系づけると、(1)万葉主義歌論、(2)古今主義歌論、(3)新古今主義歌論、(4)客観主義歌論（理論主義歌論ともいえる）、(5)現実主義歌論の五つの歌論体系に於て認識することが出来る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二

近世歌論の体系の一つとして万葉主義を認めることが出来る。この歌論体系は「まこと」を中心としたもので賀茂真淵を中心とする。しかし真淵より先に上代主義の中に万葉集を重んじ「まこと」に基づく「ことわり」と「わざ」とを説き、荷田在満「国歌八論」の説を批判し、それに対して反対意見をも述べている田安宗武の歌論は注目すべきものであろう。宗武の歌論は在満の「歌論八論」に対する反論の中にみられるものであり、万葉集の「まこと」を重んじた点に於て万葉主義の系列に入ることが出来る。宗武の歌論的見解は「国歌八論余言」（寛保元年）「臆説」（延享元年）「歌論」（延享元年）「歌体約言」（延享三年）等によって見ることが出来るのである。上代的な「まこと」の上に理即ち「ことわり」と事即ち「わざ」とを重んじた考え方は「国歌八論余言」の中にみられる。これは宗武の基本的な立場であった。

> さればかの「八雲立つ」の御歌そのさま暢びらかにして詞優なり実に常のことばにあらずかつ歌はうたふべきものなればおほ様その様暢びらかにつらねて意を遣るものなりと知るべし諸々の道みな理と事との侍るなり歌の道もまた然りよくよく弁ふべきことなり(1)

宗武は万葉より更に記紀の歌謡にさかのぼり、上代の歌はその「さま」がのびのびとして詞も優であるといい、その上代主義の上に歌論的見解をのべている。歌の道には「ことわり」と「わざ」とのあることをこの最初のところで述べていることは注目に値することである。上代の歌はその「さま」「すがた」がのびやかであり、詞が優である、といっているが、それは歌がうたわれるものであるということを示している。上代の歌は「まこ

と」があり、その詞も優美であったことを述べているのである。

前にもいひし如くこの道にも理とわざとのはべるなりされば両つながら全からでは歌の道とはいい難かるべしたとへば正しき人はおのづから歌の理にかなへれどその詠みつる歌さしもあらねば理を得たれどもわざを得ざるなり心正しきにもあらぬ人にても歌をめでたくよめるもあるべしこれはわざを得たれど理を得ざるなり(2)

ここで宗武は歌の道に「ことわり」と「わざ」との二つのものが調和した姿であることがすぐれた歌であると考えたのである。それではこの「ことわり」と「わざ」とは歌論の世界で考えると何であろうか。厳密にいえばここにも歌道の世界と古道の世界との混同がみられるのであり、「ことわり」は多分に古道的世界のものを持っているのである。このような考え方は真淵にしても同じことであって、古道的な世界と歌道的世界とを混同して一つであると考えていたことは否定出来ない。心の正しい人とか正しくない人ということは、直接には歌論の世界に関係ないものである。それが心の正しい人ということが公然と表に出てくるところに古道的な心と歌の心との混同も存するのである。しかし若干の混同はあったにせよ歌の世界に「ことわり」と「わざ」とを考えたことは注目に値する。宗武の考えた「ことわり」というのは古今集序でいう心に通ずるものであり、歌の内容的なものである。これに対して「わざ」というのは古今集序の詞に通ずるものであって、歌の表現形式的なものである。宗武の考えた歌というものは上代的な歌であり、いやしい詞を以て徒らに飾った今の歌よりは「まこと」があり、「ことわり」と「わざ」とにすぐれた上代の歌を理想としている。在満の新古今主義は到底この万葉主義であった宗武の容れるところではなかった。詞華を翫ぶことなどは全く歌の遊戯であり、歌の堕落であるとみたのである。

その故は八論余言にもいひしごとくすべてのことわざ必ず理を本とすればわざは是に随ふなをもしわざを本とせんには必

ず理は違ふべしかの家をも財をも故なく打ちすてて世の外に這ひかくれて心静かに歌を翫びてよしとするなどいかで歌の理り好む人とやはいふべきこれ等は唯わざのみを好みて終に理に違ひたるなり(3)

宗武は理を本とする考え方であり、歌は心を本として詞がこれに随ふものであると考えたのである。「わざ」を本として考えるならば必ず理に違うのであり、これは古今序以来の歌論の主流的な考え方である。そして心詞論の基本でもあったのである。歌は「ことわり」を本とすべきであって「わざ」のみを好んで行けば「ことわり」に違い、歌の道は転落することを説いているのである。この考え方は心を中心とし「まこと」を重んずる万葉主義歌論であった。そして宗武は真淵に先んじてこの万葉主義を唱えたことは注目に値するものがある。しかし彼もやはり古道主義者であって、歌の文芸性を明白に認識していたか否かについて問題が存する。彼には別に歌論という書があるが、これも古道主義の立場で、漢詩との関係を考えながら歌道を論じたもので、「ことわり」と「わざ」との関係が考えられている。しかし歌論としてはもう少し歌の本質的なものについて考うべきであり、歌の文芸性への認識はやや乏しいことがみられるのである。この古道主義的な考え方は真淵へも展開しているのである。真淵にも同じくみられるようにこの宗武にも歌の文芸性よりも古道的なもの、政教的現実を重くみようとする傾向がみられる。「ことわり」を説くことはよいとしても、この「ことわり」の中に政治的なものや道徳的なもの古道的なものを考えて「ことわり」がよく表現されることはそれだけ政教が行なわれているのであるとみる所は、功利的な現実主義となるのである。この現実主義や万葉主義の中により多く文芸的意識を明らかにした者が真淵であったのである。

註（1）国歌八論余言　日本歌学大系第七巻　九九頁
（2）同　同　一〇三頁

（3）臆説剰言　同　一三九頁

三

近世の歌論に於て万葉主義を高くかかげて万葉集の価値を再認識し「まこと」によって歌論を展開したのは賀茂真淵である。真淵は近世歌論史に於て極めて高い地位にある者で、彼の歌論の中心は宗武と同じように万葉主義であった。しかし宗武と違うところは、歌の文芸性をより多く認識していたということにある。真淵も宣長も歌論を残しているが、彼等は同時にすぐれた国学者であり、復古主義者であり、古代主義者であったのである。歌の心の中に大和魂が出てきたり、浄く直き心が現われると、歌道と古道・神道が混同して歌はその芸術性を失い、歌道即古道となるおそれが多分に存するのである。そうなっては文芸の自律的世界は存在しないのである。

真淵の万葉主義歌論は、「国歌八論余言拾遺」（寛保二年）「国歌論」（寛保二年）「再奉答金吾君書」（延享元年）「万葉考序」（宝暦十年）「歌意考」（明和元年）「にひまなび」（明和二年）「古風小言」等によってみられる。万葉的「まこと」に基づく自然真情説である。歌というものは人間の真情を自然にさながら表現したものであるという考え方が根本をなしている。真淵の歌論として歌の成立する本として真情ということと自然ということが二つの大きい要素になっている。人間の真情は当然に作為技巧を斥けるものであり、従って在満の国歌八論の説にも反対の立場である。真淵は人の心の純粋な姿を上代的なものの中に求め、理想的精神を大和魂といい、これを上代人の高く直き自然的精神であると考え、ここに「ますらをぶり」を説いたのである。すべての作為と技巧を去って、高古雄渾な自然の真情を詠み出すことが歌の理想であると考えた所に上代主義による万葉主義が認め

られる。彼は歌に於て「ますらをぶり」を主張し、「たをやめぶり」を斥け、古今集や新古今集を斥けたのである。万葉集のみが歌のあるべき姿であると考え、古道主義に基づいてこの高く直き精神を重んじたのである。と同時に「国歌八論余言拾遺」では田安宗武の説をとりあげ、その非を指摘して歌と政教との区別を明白にしたのである。即ち文芸と政治との区別を立て、文芸の機能と政治の機能とを別に考えたところはたしかにすぐれた見解であろう。

真淵によれば万葉の歌が絶対的にすぐれたものであるとみたのである。これは古道主義や上代主義から来る必然の結果であって、上代的な高く直き心の表現は必然的に万葉集であったからである。歌論の本質的なものからみると真淵の歌論は景樹あたりの歌論にくらべるとやや雑なところがみられるが、歌に於ける真情と自然とを極説した点は注目すべきところである。真淵は芸術主義を説いたといわれるが、ただこの真情と自然だけを説いたのでは真の芸術主義であるとはいえない。人間の真情を説くことは古道主義の立場としては極めて重要であるが、文芸としての歌の本質からみると、この真情がいかに表現されて歌の本質としての余情の世界を形成したか、その余情の本質把握は実は大きい問題が存する筈である。宗武が「ことわり」と「わざ」とを説き、すべて「ことわり」に合うことが必要であると説いたのに対して、「ことわり」のみによって歌は成立するものではなく、人間の真情が重要であることをのべ、真情説を高く掲げているのである。

歌は人情をいひ出すものなれば凡のことわりにはたがふもあれど其一人の上にてみればかへりてまことに然りけりと思ひやられてなつかしきも待り(1)

歌というものは人情を自然に表現するものであるから「ことわり」に違うものもあることをのべ、人情即ち真情表現説を強く主張しているのである。この真情の発するところ歌となり、その歌は古代の歌即ち記紀歌謡や万

葉集の歌の中に最もよく現われていると考えたのである。

凡そ理は天下の通理ながらはた理のみにて天下の治るにあらず詩は人のまことをのべ出すにそのおもふごとくの実情みな理あらんやただ理は理にしてそれが上に塡へがたきおもひをいふを和の語にわりなきねがひといふたとへば花を強ひて待ち月をいたく惜むがごとくはかなきことすら後にふれては然ること待りまして身の存亡にかかれらんことをやそのわりなき心をもただにいはばたれかみな哀れとせん詞やさしく声あはれにうたはんなん理の外にて人情の感ずるものなり(2)

この言説の中には理だけによって歌が成立するものではなく、理の外に人情を感じ「あはれ」を知ることが出来るのである。そして歌が「ことわり」に合い、「わざ」によるものであると考えるのは大きい誤りであることを述べ、人間の真情が自然に表現されるところに歌が生れるものであることを説いている。真淵の歌論は「歌意考」と「にひまなび」の中によく現われている。真淵は「にひまなび」の中で「ますらをぶり」と「たをやめぶり」との二つについてのべ、万葉集を「ますらをぶり」とし、古今集以下を「たをやめぶり」としている。そして「たをやめぶり」を斥けて万葉の高き直き心の上に成立した「ますらをぶり」が歌の理想的な姿であると述べているのである。この「にひまなび」の説は景樹によって激しく反論されたものである。宗武の「ことわり」と「わざ」とを斥けて歌の心としての人間の真情を説き、歌の文芸性をある程度認めている処は大きい特色であるといえる。真淵は宗武の功利主義的な歌論に対しては、真情の自然表現を説いて歌の文芸性を認めることに一歩進めたのであるが、古道主義の範囲を出ることが出来なかったのは一つの限界でもある。純粋に歌の文芸性の上に立った歌論の展開はみられなかったが、万葉集の心を第一義的なものとして、そこに真情としての「まこと」を認め、その自然的表現の世界に歌の価値を認識した点は、近世の万葉主義の一つの体系を作るものとして注目に値するものである。この「まこと」を重んずる傾向は近世に於ては実に大きいものであって、そこには万葉的

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com